

< 報告 > 中級聴解クラスにおける中国人学習者のラジオニュースの誤聴分析

著者	常木 由布子, 小野 正樹
雑誌名	筑波大学留学生センター日本語教育論集
号	18
ページ	125-135
発行年	2003-02-22
その他のタイトル	<Practical Articles>An Error Analysis of Chinese Learners in Listening Comprehension of Radio News Programs
URL	http://hdl.handle.net/2241/11125

中級聴解クラスにおける中国人学習者の ラジオニュースの誤聴分析

常木由布子 小野正樹

要 旨

聴解クラスでラジオニュースの聞き取り練習を行った。クラスでは構文把握を目的としたが、中国人学習者には、構文把握以前に他の学習者には見られない単語の聞き取りミスが目立った。その原因を分析すると、特殊拍の聞き取りが弱いことに加えて、辞書を利用しているにも関わらず、学習者自身の単語類推からの誤りが見られた。その傾向について報告する。

【キーワード】 漢語 未知語 音声媒介の回答 文脈媒介の回答

An Error Analysis of Chinese Learners in Listening Comprehension of Radio News Programs

TSUNEKI Yufuko, ONO Masaki

【Abstract】 In listening comprehension, we practiced listening to radio news programs. The purpose was to understand the sentence patterns, but some Chinese learners couldn't understand word units, let alone understanding sentence units. Analyzing the tendency of errors, we observed that there was a process of false analogy, and in addition, they are not good at catching "special" moras.

Keyword: Chinese Words, Unknown Words, sound-based answers, context-based answers

1. はじめに

留学生センターの2001年度技能別クラス「聴解2」⁽¹⁾では、NHKラジオニュースの一部分を聞き取り、スクリプト中の空欄に書き込ませるタスクを課した。その中で漢字圏学習者、特に中国語母語話者の回答に非漢字圏学習者とは異なる傾向が見られた。

漢字圏学習者、あるいは中国語母語話者の聴解技能については、様々な角度から研究が行われ、彼らが日本語を学習する上での音声・音韻上の困難点は、かなりの程度明らかにされている。しかし、それらはいくまで「聴解」という枠組みの中で捉えた研究であり、聴解から表記に到るまでのプロセスを観察したもの、特に語彙に関連づけた研究は少ないように思われる。従って本研究では、対象を中国語母語話者に設定し、主に語彙に焦点をあてて誤答の分析を行い、聴解行動を観察する。

2. 漢字圏学習者の聴解行動についての諸研究

2.1 中国語母語話者の音声・音韻上の困難点

中国人日本語学習者の音声・音韻上における母語干渉について、山本(1997)は主に次の二点を指摘している。一つ目は破裂子音の有声無声の区別が困難であるという点である。二つ目としては、発音表記の問題から、中国人学習者が日本語のパ・タ・カ行を中国語の有気音で、パ・ダ・ガ行を無気音で発音する傾向があるということを挙げている。

2.2 漢字圏学習者の誤聴分析

中国語母語話者の持つこれらの問題点は、聴解においてどのような表れ方をするのだろうか。フォード(1992/1996)は、文法的側面からこれを調査し、文法力の弱い学習者ほど音声を優先させてしまう傾向があることや、不確定な語については、より親密度の高い語や表現に聞いてしまうことを指摘した。また、未知語の聴解について、学習者は自らの頭の中にある文法・意味・語彙等の範囲外の事については、たとえ音の受容はできても聴解を行う事はできないとしている。

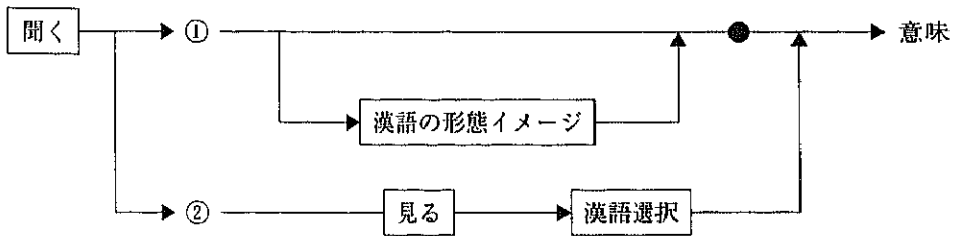
小河原(1996)は誤聴を主に音声の面から分析し、中国語母語話者の特徴を韓国語母語話者と比較する事で考察している。対照の結果、韓国語母語話者の方が正答率が高いという事実が得られた。その原因について、小河原は「韓国語話者の方が語彙リストをうまく活用していたとも考えられる」とし、さらに中国語母語話者の誤答の内容については、助詞に関するものが多い点に着目し、中国語に助詞に相当するものがないという母語の文法的干渉をその原因として指摘している。

2.3 漢字圏学習者の漢語知識が聴解に与える影響

漢字圏学習者の日本語習得について考察する際、彼らの持つ漢語知識は無視できない問題で

ある。中国人日本語学習者について継続的に調査を行っている山本（1994/1997/2000）は、母語干渉の問題を音韻・音声の点からみると同時に、彼らの下位知識である漢語の知識が聴解において影響を与える場合があるとしている。ただし、上級学習者における聴解力を支える下位知識として、漢語知識は和語知識より弱い寄与の仕方をしている、と指摘する。

また、小林・李（2001）は準漢字圏である韓国語母語話者を対象に、彼らの漢語知識が日本語の音声の知覚に与える影響を、実験に基づいて分析している。その結果、漢語の音声から意味への到達過程には、〈図1〉のような2種類が見られた。また、小林らは、漢字力のある学習者ほど音声の知覚に対する戦略として漢語の形態イメージを用いている可能性があるとしている。



〈図1〉韓国語母語話者の漢語認識ルート（小林らによる）

2.4 問題の所在

前述の山本（1994/1997/2000）の分析によると、上級の中国語母語話者の場合は、聴解活動においては漢語知識より和語知識が強く影響を与えるとされていた。しかし、日本語の語彙習得が上級者ほど進んでいない初級・中級段階の学習者の場合には、彼らの漢語知識はどのような関与の仕方をするのであろうか。また、小林らの行った実験は選択式の問題を使用したものであったが、自由記述式の問題で聴解を行った際に、中国語母語話者の回答には何らかの特徴が見られるだろうか。

そこで、これらの問題について、実際に中級段階の中国語母語話者を対象を絞って分析を行った。

3. 調査方法

3.1 調査対象

3.1.1 被調査者

筑波大学留学生センターにおいて開講されている聴解2の受講生14人のうち、中国語を母語とする学習者9人を対象とする。

3.1.2 調査期間

2001年4月～6月に得られたデータを基に調査を行う。

3.1.3 聴解2のクラスについて

「聴解2」は中級レベルでの技能別クラスであり、受講者は初級文法を終了したことが前提となっている。ここでは、文構造、特に節の聞き取りを主目的として授業が進められる。聴解クラス全体の中では、単音レベル・単語レベルの聴解の後に行う授業であり、談話単位の理解へのステップとして位置付けられている。

調査対象とした年度では、1分程度のNHKラジオニュースを主教材として使用し、その一部分を学習者に聞き取らせた。授業においては、各学習者は自分のペースでカセットテープを聴き、タスクシートに聞き取った音声を自由記述式で記入していく。一定時間がたったところで、教師が正答を提示する。また、宿題として同様のタスクシートを渡し、期限内に提出させる。〈表1〉の通り、トピックには様々な分野があるため、専門用語等については事前にキーワードとして、英訳をつけたリストと同時に学習者に与えられる。本研究では、これらの宿題から得られた学習者の回答を分析の対象として用いる。

第1週	大リーグ
第2週	天気予報
第3週	自動車のリコール
第4週	山の遭難
第5週	海の事故
第6週	環境会議
第7週	外国人参政権
第8週	政治家の資産

〈表1〉宿題で使用したラジオニュースのトピック

タスクシートのサンプルを示す。

山の遭難

01 先月27日から山形県と宮城県の県境の

標高 () まま、
行方がわからなくなっていた東京目黒区に住む山形大学元教授の73歳の
()。

08 () されたのは東京目黒区に住む山形大学の元教授の
() さん73歳です。

09 山形県警察本部の調べによりますと、長谷川さんは

先月27日に一人で山形県と宮城県の県境にある標高1485メートルの
() ため、

先月29日に家族から捜索願が出されていました。

10 長谷川さんは今朝7時半頃願土山の中腹の通称八方沢で倒れているのを、
()、
山形県の ()。

11 長谷川さんは () ものの、
全身を打っていて ()、
警察では長谷川さんの回復を待って、
() ことにしています。

12 警察と消防では家族からの届け出を受けた翌日の先月30日早朝から、
願土山の () が、
見つけることができないまま、
きのうで ()。

県境 (けんざかい) a prefectural boundary

行方 (ゆくえ) the place (where) sb has gone ; sb's whereabouts

無事 (ぶじ) safe ; secure

救助 (きゅうじょ) する rescue ; save

捜索願 (そうさくねがい) an application to the police to search for a missing person

収容 (しゅうよう) する pick up

別状 (べつじょう) がない there is nothing wrong

3.2 手順

3.2.1 回答の集計

前述のデータにおける学習者の回答から、対象となる誤答を抽出する。今回の調査では、名詞に焦点を当てて分析を行った。ただし、人名・地名等の固有名詞は対象から除外している。

3.2.2 誤答の分類と分析

前項の結果として得られた誤答を、表記上の特徴、即ち仮名表記か漢字表記かを、分析の第一段階として分類する。以下より、調査結果を詳細に述べることとする。

4. 調査結果

データを集計した結果、名詞に関わる誤答の総数は56（延べ・内空白4）例であった。それらを表記形態別に分類し、以下に述べる。

4.1 かな表記の誤答

かな表記で表れた誤答は、延べ数にして15例であった。誤答は次の通りである。

正答	誤答
救出	きゅうじょ
指導	シート
釣り	つぎ
衰弱	せいじゃく
臨時	みんじ
各国	がっこく
状況	じょうきゅう
登山道	とせんど とざんろ
毎年	まいどし
防災	ぼさん ぼさ
ヘリコプター	えりけふた
雷	かみがり
別状	てつよう

〈表2〉かな表記の誤答例

4.2 漢字表記の誤答

次に、漢字表記として表出した誤答について述べる。このタイプは延べ数にして、37例見ら

れた。調査対象である中国語母語話者は、非漢字圏学習者（韓国語母語話者を含む）と比較した時に、こちらのタイプの誤答例が多く見られるのが特徴的である。以下〈表3〉で、具体的な誤答例を示した。

正答	誤答
救出	救助 救援
件(と)	県都
全体	全休
発見	發現
提出	提示
臨時	認知 民事 年次 人事
成立	精密
国々	国組
事故	事件
状況	商況
病院	医院
無事	無理
先	最近
遭難	受難

〈表3〉漢字表記の誤答例

5. 結果の分析

5.1 かな表記の誤答に見られる特徴

かな表記の誤答から分析を行うと、学習者にとって問題となる言葉の音声的な受容が出来なかった時、聞き取った音をそのまま表記したのがこのタイプの誤答である。同じクラスを受講していた非漢字圏学習者の回答は、漢字表記よりもこちらの方が高い確率で表れているが、中国語母語話者の場合は、その比率が逆転する。このタイプの誤答の主な特徴としては、表出の結果が言葉として意味をなしていない場合が多いということである。

- 例) ○登山道 → ×とぜんど とざんろ
 ○防災 → ×ほさい ほさ
 ○ヘリコプター → ×えりけふた

しかし、かな表記の誤答であっても、有意義な場合もある。

- 例) ○救出 → ×きゅうじょ
 ○指導 → ×シート

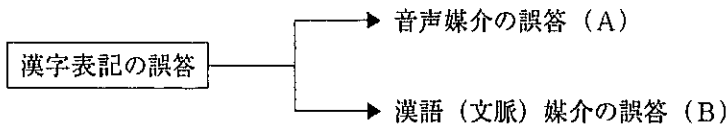
これについては、次のように分析可能である。今回の調査で得られたかな表記の誤答15例は全て、対象者9名のうち、特定の2名から得られたものである。これは各学習者の聴解への取り組みの相違と見ることが出来る。つまり、かな表記を固持する学習者は、自らの聴解能力を向上させるために、一つ一つの音に集中し、その結果得られた回答の意味の有無は検討されない。反対に漢字表記を採用する学習者の場合、重視するのは回答から導かれる文脈であり、それが前後の文意と合致していれば、聞き取った（あるいは聞き取れなかった）音の細部は無視される。

5.2 漢字表記の誤答に見られる特徴

本調査において中国語母語話者に特徴的であった漢字表記の誤答について、分析を加えたい。漢字表記の誤答とは今回の場合、ある漢語名詞を別の漢語名詞に変換した誤答と言い換えられる。データから得られた例を見ると、これらの誤答群は、その特長によってさらに2種類に下位分類できると思われる。

5.2.1 下位分類

中国語母語話者による漢字表記の誤答は、ここで以下のように下位分類することができる。



(A)は学習者がディクテーションを行う際に、聞き取った音声を主な手掛かりとして回答を導き出したと思われる誤答群である。(B)はこれと異なり、音声よりも漢語知識に頼って、前後の文脈に合致するような単語を考えた可能性が高いグループである。次項よりそれぞれについて言及する。

5.2.2 音声媒介の誤答

このタイプについては、学習者が聞き取った音声から類推し、類似した音構造を持つ既知語を回答したという過程が考えられる。この場合、正答と誤答の間には音構造の類似性は見られるものの、文全体の意味は異なったものとなる。

- 例) ○臨時 (臨時国会に法案を提出した) → ×認知 民事 人事
 ○成立 (成立を目指す) → ×精密
 ○無事 (無事に救出された) → ×無理

※カッコ内が元の文である

これらの誤答は、学習者が音声を第一の手掛かりとしている点で、かな表記の誤答とほぼ同様の過程を経て表出したものである。例えば、[rinji] という音が学習者に [minji] として認識された場合、漢語知識を持たない非漢字圏学習者の多くが「みんじ」と表記しているのに対し、漢字圏学習者は [minji] という音配列に合致する漢語を自身の漢語知識の中から検索して「民事」という回答を導き出した可能性が考えられる。

5.2.3 漢語 (文脈) 媒介の誤答

前項の音声媒介の誤答に対して、今回の調査で際立った特徴として見られたのがこのタイプである。この場合は誤答を文中に当てはめても文意に大きな違いは生じない。この類の誤答では学習者は語の一部を聞き取り、文意と照合して自身の内部辞書から該当すると思われた漢語名詞を導き出した過程が想像されうる。従って、正答と誤答の間の音構造における類似性は、音声媒介の誤答より低いものである。

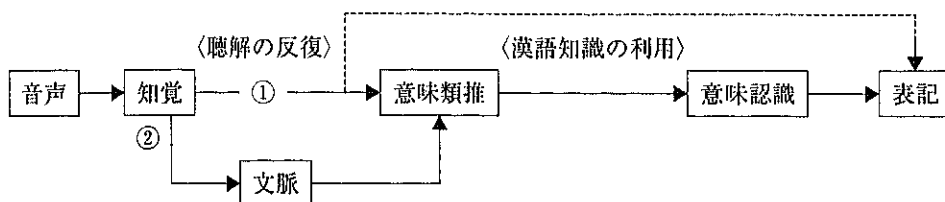
- 例) ○救出 (無事に救出された) → ×救助 救援
 ○提出 (臨時国会に法案を提出した) → ×提示
 ○病院 (病院に収容された) → ×医院

「救出」を例にとって考えてみよう。[kyuusyutu] という音連続の中で、学習者が知覚したのは [kyuu##] という部分である。音声を主な媒介にする場合、ここでとられ得る対策としては、何度か繰り返して問題となる音連続を聞く等といった事が考えられ、それでも知覚できなかった場合は空欄として提出する、聞こえたままを表記する、といった結果となるであろう。しかしこのケースでは、上記の手続きを十分にとる前に、前後の文脈やキーワードに合致する「救※」という言葉学習者自身の漢語知識の中から検索し、問題となる音連続はそれ以上考慮に入れず「救援」「救出」等の回答を表記しているのである。

5.3 考察

以上の分析から、中国語母語話者が聴解から意味類推、表記へと到る過程の中で、漢語知識を積極的に利用している場合があるということがわかった。それは主に問題として与えられた音連続の一部、または全部が聞き取れなかった時に、前後の文脈から判断して単語の意味を類

推し、既知語を回答するというものである。これを音声媒介の誤答と比較した場合、そのプロセスには〈図2〉のような違いがある。



〈図2〉 媒介の手段による学習者の聴解ルート

①は音声を知覚した後に聴解を反復し、音声のみを手掛かりとして意味類推を行っている（あるいは意味類推をせずに直接表記に結びつく）音声媒介の過程、②は音声知覚に文脈による意味の類推を加え、そちらを主な判断材料として意味認識に到る漢語媒介の過程である。ここから、日本語の語彙習得が上級学習者ほど進んでいない初級終了段階の漢字圏学習者の場合、聴解の過程においても漢語知識が母語干渉として積極的に関与していることが考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では中級段階における中国語母語話者の聴解行動を観察する一端として、ラジオニュースのディクテーションから得られたデータを基にして分析を行った。聴解の結果として表出した語彙に注目した結果、その特徴は音声的に間違えた結果とは考え難い誤答を見ることができた。これは、正答との間の音声的相似がさほどなく、元の文に誤答を当てはめても文意が大きく変わらないという傾向から導き出されたものである。このように、完全な漢字圏である中国語母語話者が持つ漢語知識は、音の受容が出来なかった時に現れやすく、その場合は音に頼らずに文脈から想像しうる言葉を回答してしまう場合がある。この傾向は、聴解活動において文の大意を理解するにはプラスの働きをする。しかし、中級段階の聴解クラスでの主な目的である「音の聞き取り」は、学習者が特に②の手続きを安易にとりつづけた場合には、達成されにくいものとなる。

では、この問題をクラスで改善するには、どのような方法があるだろうか。前述の小林ら(2001)は、学習者の漢字知識と音声認識を効率よく結びつける手段として聴覚・視覚両方からのインプットによる定着の促進が必要だとし、聴解・漢字・発音クラスの枠を超えた指導法を提案している。小林らの研究は韓国語母語話者を対象としたものであったが、中国語母語話者でも中級段階の学習者の場合、彼らが持つ母語の漢語知識を上手く利用しつつ、日本語の漢語知識へとスライドさせていくような指導（例えば、初級段階からの聴解クラスでの辞書利用の指導など）が必要ではないかと思われる。

注

- (1) 筑波大学地域研究研究科において実施されている日本語教師養成プログラムでは、従来行われていた教壇実習に加え、2001年度より同大学留学生センターの授業に参加するという形の教育実習が開講された。常木は技能別クラスのひとつである「聴解2」を選択し、留学生の聴解行動を観察し、分析を行った。

引用文献

- 小河原義朗 (1996) 「ディクテーションにおける誤聴分析の試み」、小林典子『外国人日本語学習者のディクテーションに見られる誤聴分析』(科学研究費 研究成果報告書) : 21-38
- 小林尚美・李友娟 (2001) 「韓国語母語話者の聴解行動における漢語の役割 —聴解・漢字・発音クラスの枠を超えた指導法への提言—」、『2001年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』 : 97-102
- フォード丹羽順子 (1992) 「聴解ディクテーションの「誤聴」分析—中・上級者の文法の困難点を探る—」、『日本語教育論集』 7、筑波大学留学生センター : 45-64
- (1996) 「日本語学習者による聴解ディクテーションに現れた誤りの分析—文法および音声的側面に焦点を当てて—」、『日本語教育論集』 11 筑波大学留学生センター : 21-40
- 山本富美子 (1994) 「上級聴解力を支える下位知識の分析—その階層化構造について—」『日本語教育』 82号 : 35-46
- (1997) 「母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題—中国語系日本語学習者の中間言語分析より—」、『富山大学人文学部紀要』 26 : 225-237
- (2000) 「中国人日本語学習者の有声・無声破裂音と聴解力の習得研究—北方方言話者に対する聴取テストの結果より—」、『日本語教育』 104 : 60-68